

JAICOH NEWS LETTER

NO:70 2014年2月発行



歯科保健医療国際協力協議会

Japan Association of International Cooperation for Oral Health

〒113-8549 東京都湯島1-5-45 東京医科歯科大学 歯学部口腔保健学科
URL: <http://jaicoh.org/> Email: info@jaicoh.org Tel: 03-5803-4971
郵便振込: 00140-9-599601 歯科保健医療国際協力協議会
発行: 白田千代子 編集: 中久木康一

JAICOH 冬の研修会のご案内

下記の通り、JAICOH 冬の研修会を行います。ふるってご参加ください。

日 時： 2014年3月29日(土) 15:00~17:00

テーマ： 「人道支援の品質管理や説明責任についての国際基準を知ろう！
～スフィア・スタンダード，HAP 基準 2010～」

講 師： 原田奈穂子（看護師・保健師、ボストンカレッジ・防衛医科大）

会 場： 東京医科歯科大学内を予定

※ 終了後、お茶の水界隈にて懇親会

東日本大震災の支援に関わった方や団体も多いと思いますが、被災地や被災者のニーズにきちんと対応ができたでしょうか？ 速やかな対応が求められる中、必ずしも十分な対応ができたとは言えない面もあったことでしょう。また、他の支援団体や地元機関、そして地方行政など、様々な関係者と協力・調整しながらの支援活動となったと思いますが、それらとの関係性も十分とれたでしょうか？

国際的に、人道支援や開発協力を行う団体には、「説明責任」と「質の高い事業」が求められています。人道支援の品質管理や説明責任についての国際基準である、「スフィア・スタンダード」「HAP 基準 2010」とはどのようなものかを知り、今後の各団体・個人の活動に活かしましょう。

【スフィア】1) 災害や紛争によってもたらされる人々の苦しみを可能な限り軽減する、2) 災害の影響を受けた人々は尊厳のある生活を送る権利があり支援を受ける権利がある、という2つの信念を基礎としている。スフィアの目的は、あらゆる支援が受益者の「人権を守る」ことを中心に行われるための権利保護の原則や行動規範を理解し、最低基準を活用しつつより質の高い支援が責任を伴って行われることにある。

【ヒューマニタリアン・アカウンタビリティ・パートナーシップ (HAP)】人道危機で影響を受ける人々に対する説明責任を推進することを目的として2003年に設立された。HAP 基準に準拠することで、組織はその支援対象者や受益者のために行う業務に対する説明責任を負うことになる。

※ 詳細は、決まり次第 JAICOH-ML にてご連絡いたします。

※ Community Dental Service との共働開催となります。

JAICOH 第24回学術集会（ご報告）

平成25年7月7日（日）に東京医科歯科大学において行われた第24回JAICOH学術集会から、今回は、歯科衛生士シンポジウムの様子を報告いたします。

4団体5名から、それぞれの活動と経験の発表の後、会場からの質問もまじえての討論となりました。多くの学生や若手も参加しており、刺激の多い時間となったことと思われました。

歯科衛生士シンポジウム

「世界中の笑顔のために～歯科衛生士だからこそできること～」

座長：白田千代子（JAICOH会長・ネパール歯科医療協力会）・沼口麗子（NPOカムカムクメール）

「国際歯科保健活動を通しての歯科衛生士の課題と展望」

根木規予子（ネパール歯科医療協力会）

ネパール歯科医療協力会は1989年から活動を開始。当初はメディカルケアが中心だったが、近年は学校や地域のマザー達が行うヘルスケア活動が中心となっている。医療格差や民族、カーストなどにより、十分な医療が受けられる状況下ではない人々にとって、医療に頼り切ることなく、自然と人間、社会と人間の関わりの中で自らの健康を保つには、地域や身近なコミュニティにおいて活動を行うことで、持続的な保健活動が期待できる。

10年ほど前から活動に参加している。ネパールでの活動を通じ、家庭訪問や保健指導で話を聞いたときに「生活に寄り添うことの大切さ」「自分が伝えようとすることに執着しすぎていること」などに気づき、人々の訴えをどう解釈するかが重要だと感じた。専門家として何ができるかではなく、人々が何ができるかという視点を常に持ち合わせていたい。長きにわたり活動を支えてきたのは、人と人との出会いや仲間がいたからである。現地へ赴き、顔を合わせて話をしたり、同じ目線で成長していく感覚を共有できることが信頼関係の礎となっていく。そして、このことは日本の臨床にも通じる。

現在日本で活躍している歯科衛生士の多くは、診療所内で完結する業務に従事しているが、これからの歯科衛生士は、口腔内だけではなく、全身的なことや生活環境、地域をみるのが重要になってくる。診療室にとどまらず、地域や社会、海外に積極的に出て、多職種との連携で働いて行って欲しい。国際歯科保健活動への参加をきっかけに、地域や様々な立場の人と連携できる広い視野を持って活動できる歯科衛生士が増えることを期待したい。その実現にはパートナーである歯科医師の理解、サポートも不可欠である。



「カンボジアにおける国際歯科保健活動」

藤山美里（NPO カムカムクメール、日本歯科大学東京短期大学）

NPO カムカムクメールとは、カンボジアの子ども達のむし歯予防を基盤に、子どもを取り巻く環境改善を現地の方々と協力して支援する 2005 年に設立された団体である。年に 2 回、10 日間程の活動をしており、私は 2007 年の第 2 回活動より参加している。

[カンボジア人主体の活動]を理想としており、施設スタッフや教員養成校の学生が保健指導をできるよう教育したり、現地の歯科医師に活動参加してもらい、主に歯石除去などをお願いしている。

口腔衛生と言っても、歯ブラシ指導だけではない。カンボジアには昔から指で歯を磨く習慣があるため、歯ブラシがないとき、また買えないときには指で磨くことも大切だと伝えている。

しかし手洗い習慣もついていないことも多いで、歯みがきの前には手をきれいにしよう！と、まずは手洗いから生活全般の衛生指導をしている。

日本歯科大学東京短期大学の第 3 学年の選択科目として、国際歯科医療・ボランティア論を担当している。日本にいてもできる国際協力もあるのでは？ということで、カンボジアに持って行くプレゼントを 2010 年から学生がつくっている。識字率がまだ低いいため、歯みがきや手洗い、また甘い物の摂り方などを絵でわかるような小さな冊子をつくり、現地で子ども一人ひとりに渡している。

今年は夏に学生 5 名が参加してくれることとなり、全員でパペットを用い人形劇を行い、歯みがきの大切さを教える予定となっている。講義を通じ、学生へ途上国での保健指導の大切さが伝わり嬉しく思う。しかし、日本での歯科保健指導がきちんとできていないと途上国でも指導はできないため、基本は重要である。

年々、海外・留学・国際協力などに興味を持っている学生が増えていると感じる。歯科衛生士という資格は、国内のみならず途上国でも最大の武器になると思って欲しい。また私自身は、今後も自分が経験したことをできる限り発信していきたいと思っている。

「20 余年にわたるモンゴルとの国際歯科医療協力」

米花佳代子（日本モンゴル文化経済交流協会、大阪発達総合療育センター歯科）

1991 年からはじまったモンゴルの活動に 1993 年から関わっており、去年で 26 回となった。もともとは勧められて参加しただけだったが、実際に行って見たらあまりにむし歯の多い子供たちに何かできないかと思い、最初は 1 カ月行き、その後は年に 1 回、1 週間行っている。

モンゴルでは 280 万人の人口に対し約 800 人の歯科医師がいるが、ソビエトの崩壊により歯科医院の開業や自由診療が可能となり、都市に集中している。歯科衛生士に関して言えば、2010 年に歯科衛生士の養成機関ができたが、まだ卒業者は出ていない。

医療協力の経過として、最初はやって見せる、次は一緒にやる、そして今はやるのをサポートする形となっている。1994 年には歯科診療所を設立し、2002 年には大きく新築移転し、ここを拠点として検診や保健指導を行っている。日本人が生き活きとやってみせると、その熱意や大切さがモンゴル人に伝わると考えている。また、デンタルナースの養成講座も行っている。2000 年からは全国歯科疾患予防プロジェクトをはじめ、5 年間の小児検診をはじめた。

参加した歯科衛生士に意識調査をしたことがあるが、5年～10年、診療所勤務、有給／夏季休暇が多かった、参加後に歯科衛生士に対する考えは、80%以上が変わった点があると答え、歯科衛生士としてさらなる可能性や展望を見出したという人も80%弱いた。



海外で歯科活動をするということにより、歯科衛生士の社会での地位の確立でき、歯科衛生士という職種をより多くの人に知ってもらえると考えている。また、歯科衛生士としての自分を見直す場ともなる。国際協力は与える場ではなく学ぶ場であり、問題を発見し解決する能力を養うこともでき、活動を通じての人のつながりも大きな財産となる。

「トンガ王国における活動を通じて知った事」

飯田好美・鈴木千鶴（南太平洋医療隊、カウムラ歯科医院）

トンガは人口11万人で38%が14歳以下、病院4、歯科医師9名、デンタルセラピスト20名の国であり、学校や乳幼児に対する歯科保健活動や、オーラルフェスティバルの開催、ワークショップの開催、スタッフ教育、器材や救急車の寄贈などを行ってきている。

現地では、行事や天候によって活動ができなかったりもしたが、大きすぎたり、毛が開ききったりした歯ブラシを使っている人が多かった。むし歯は多くても笑顔は輝いており、その笑顔を守りたいと思った。技術移転などを通じて、今ではデンタルナースも歯みがき指導をしており、DMFTの調査も継続されて、改善されてきている。

体重計には喜んで乗り、自分の体重を他人と比べたりはするものの、食事量は多く、近くでも車に乗って移動する習慣がある。健康に気を使って何かをするということは少なく、病気になってから食事制限などをするのが現状で、健康意識の違いを感じた。トンガでは、心臓病、脳卒中、糖尿病の合併症が、死亡原因の半分を占めており、近年の高カロリー食や飲料により、オセアニア全体で肥満比率は70%とも言われている。

今まではう蝕に対しての活動を主としてきたが、今後は歯周病を防ぐ活動もしていきたいと思っており、生活習慣の改善にむけた医療スタッフや教員などの育成と、中高生や妊産婦への口腔保健啓発活動を計画している。その中で歯科衛生士は、歯科セラピストやコミュニティヘルススタッフとの協働、知識や技術の移転も、測って行きたいと考えている。

一度体験することも大切だが、継続して行くことにより視野がひろがって何をすべきかも見えてくるので、継続することもおすすめしている。

討論

日本でもできることとしては、言葉の勉強も大切だが、使える題材をチェックしたりすることも大切。とにかく、日本で楽しく仕事をするのができて、はじめて海外で貢献できるのだろうという話があった。

また、国際保健を目指す学生へのメッセージとしては、JAICOHのような情報を得られる会に参加することや、インターネットなどで情報を調べて積極的にコンタクトすること、また、海外に出て行くだけではなく、海外からの受け入れに関わること、そして、少しでもできることがないかという興味を持ち、興味があることがあったらまずは参加してみるという積極的な行動力が必要だという話があった。

どの演者からも、日本でやっていることがつなげられている、という話があり、国際保健だからといって特別ということはないという言葉があった。また、多職種連携は国際保健の現場ではより大切だと言う指摘もあった。



(記録：中久木康一)

事務局より

メーリングリスト（JAICOH-ML）に登録・投稿してください！！

メーリングリスト（ML）の運用をしています。入会している方にはぜひ、全員 ML にご登録いただきたいと思います。

ML にはぜひ、各団体の活動やスタディーツアーへの募集のお知らせなども、ぜひ投稿ください。

なおこの ML は、JAICOH 会員に限らず、歯科保健分野における国際保健、地域保健に関心のある方は、誰でも登録できます。

登録希望者は、1. 氏名、2. 所属、3. メールアドレスを、jaicoh-admin@umin.ac.jp までメール送信してください。数日以内に手続きします。問合せは、JAICOH 事務局ボランティア ML 担当 門井 jaicoh-admin@umin.ac.jp までご連絡ください。

次回学術集会は第 25 回となります。長きに渡ってこの JAICOH が続いてきたこともすごいと思いますが、四半世紀にも前に、国際保健の歯科を考えて団体を形成した当時の関係者の熱意がすごいと、改めて感じます。初の関西開催ともなり、JAICOH も新たなステージに向かっていくことでしょう。(中久木)。

JAICOH 参加団体紹介

～ 歯科医学教育国際支援機構 ～



特活)歯科医学教育国際支援機構・理事長 宮田隆

団体設立の経緯 1990年代の初頭、理事長の宮田が20年にわたるカンボジアの内戦で荒廃したヘルスサイエンス大学歯学部を目のあたりにしたことが本団体設立のきっかけとなった。宮田は、その後、定期的にカンボジアで教育支援をし、2002年、満を持して宮田は大学を辞め、特活)歯科医学教育国際支援機構(OISDE)を設立、その後は、カンボジアはもとより、ラオス、東ティモールなどで活動の場を広げてきた。

定着型の OISDE の活動 途上国への支援活動は通常、イベント型と定着型に分かれる。イベント型は年に数回現地に赴き、短期間の活動を介して口腔保健を普及させる方法である。ほとんどの歯科系 NGO がこのタイプである。一方、OISDE は現地に事務所を開設し、専門家を配置することで、より地元に着目した活動をしてきた。

歯科医学教育と巡回診療システムの確立 ヘルスサイエンス大学などをターゲットに歯学教育を行ってきた。特に、カンボジアでは政府が認定する歯周病専門医を20数名が OISDE によって資格を得た。現在、ラオスでも同様のプロジェクトを実施中である。過疎地医療に対しては、巡回型診療システムを確立しそれをカンボジア、ラオス、東ティモールで技術移転し、非常に高い成果が得られている。

Students Experiences Tour for Rural Area プロジェクト OISDE の全面的な支援のもと、ヘルスサイエンス大学歯学部の最終学年の学生に対して過疎地医療体験ツアーを2009年より開始し、カンボジア政府も認める大きな成果が得られている。

公的資金の活用 歯科系の NGO に共通していることは資金的に脆弱であることである。そこで我々は積極的に公的資金に活路を見出してきた。2002年の法人化以来、JICA 草の根技術協力・支援型2回、JICA 市民協力1回、JICA 草の根技術協力・パートナー型1回、外務省、NGO 連携無償資金協力5回、その他、トヨタ財団、東京都などからも資金を得た。

現在の活動 JICA 草の根技術協力・パートナー型のカンボジア案件は2013年11月で終了した。現在実施中のラオスでの活動は外務省・NGO 連携無償資金協力のスキームを活用し、2012年8月より3年間の期間を費やし、ビエンチャン県において看護師及び看護学校学生を介した歯科口腔保健サービスの構築を目指している。初年度では、同県看護学校に歯科・口腔保健のカリキュラムを導入し、歯科・口腔保健の知識・技術を有した看護師を永続的に輩出する仕組みを整えた。2年目以降は20のヘルスセンターに直接赴き、ヘルスサイエンス大学の先生が看護師に抜歯などの治療方法を技術移転する。

今後の展望 プンペン市内には歯科医院が乱立し、最近では5階建てのデンタル・ビルまでできた。現在、カンボジアには国立の歯学部が一つ、私立が二つ、そして軍医大学にも歯学部が出来、OISDE による歯科医学教育は、一つの区切りがついたという認識である。今後はカンボジアの医療過疎地に「食育」を普及するプロジェクトを展開してゆきたい。ラオスは我々が築き上げた歯科・口腔保健活動のノウハウを生かしてゆきたい。日本の若い世代が国際貢献に興味を持ってくれる事は頼もしいが、それを教える側の人材がまだ不十分である。案件形成や PDM の作成、成果の評価方法など、実地で体験する前に学ばなくてはいけない国際貢献活動の基礎は多い。JICOH が中心となってしっかりと国際貢献の教育システムを構築されることを期待したい。

金属回収事業 活動の資金源として、患者様が破棄した金属回収を実施している。詳細はホームページ(<http://oisdeinternation.sakura.ne.jp/oisdeinternation>)をご覧ください。